

三心即一心

聖人の真意

聖人は、至心をもつて如来久遠の真実なりと決し、信樂をもつて如来本願成就の大信心なることを説き、やがて欲生をもつて、如来救済意志の発動、即ち、如来の全功德を以て衆生に廻向したもうの願心とせられた。本願成就の大信を、衆生の上に成就せられるは全くこの欲生心、即ち一切を衆生に廻向せんとする如来の願心によるのであった。如来の願心は限りなく衆生を招喚する。この廻向と招喚の一致せる欲生心は、衆生を「不廻向」の嚴肅なる沈黙者たらしめ、金剛不壞の大信心を衆生の上に廻向顕現せしめたものであった。

かくの如く欲生心積を推し進めつつ、ついにいつしかに金剛不壞の大信心を説きたまえる祖聖の真意は奈辺にあつたのであるか。我はここに、ついに聖人の真意にふれることが出来るのである。三心即一の次の文が即ちそれである。

金剛の真心

聖人御自釈して言く、

「信に知んぬ。至心、信樂、欲生、其の言は異りと雖も、其の意、惟れ一なり。何を以ての故に、三心已に疑蓋雜わること無し。故に真実の一心なり。是れを金剛の真心と名づく。金剛の真心、是れを真実の信心と名づく。真実の信心は必ず名号を具す。名号は必ずしも願力の信心を具せざるなり。是の故に論主、建に我心と言へり。又、如彼名義欲如実修行相應故」と言えり」と。

我らはここに、教説の帰結、宗教の極致、如来本願の真意、聖人の宗教的体験の究竟的真風光に接して、名状すべからざる感銘を得るのである。

「信に知んぬ。至心、信樂、欲生、其の言は異りと雖も、その意、惟れ一なり。何を以ての故に、三心已に疑蓋雜わることなし。」

如来本願の表現には、至心、信樂、欲生の三心はある。しかし三心があつても、三即ち三であるのではない。実在するものは、ただ、如来正覺の全体が、衆生往生の全体たるが如く、自利利他一如に、大悲を成就せんとする、「若不生者不取正覺」の真実の一心あるのみである。

唯一絶対なる如来心の「体」は至心、即ち真実である。誠に如来心は、純粹至純なる真実である。その清浄なる真実心の「相」を求むれば、信樂である。一塵の疑惑をとどめざる大信心である。されば、至心の真実と、信樂とは、体相の關係にして二心に非ず、至心なるが故に、信樂たり得るのであり、信樂なるが故に真実たり得るのである。更に欲生心とは、如来心の「用」である。「はたらき」である。久遠の真実信樂は、衆生の上に欲生の大用を巻き起こすのである。至心信樂なくして、いづくんぞ、如来欲生の勅命が、衆生の無上命令たり得よう。欲生の大用あつてのみ、至心信樂は至心信樂たり得るのである。されば、

「至心、信樂、欲生、其の言は異りと雖も、其の意は唯れ一なり。」と言い得るのである。

「何を以ての故に、三心、己に疑蓋雜わることなし。故に真実の一心なり。是れを金剛の真心と名づく。」

これ誠に長き行歩の極、到達せられたる唯一絶対の結論である。

至心即ち久遠の真実に疑い無し。仏心なるが故に。信樂とは、如来の大信心海なり。もとより疑惑なきが故に信樂と云う。すでに至心、信樂に疑いなし、何ぞ、この大用たる欲生に疑いがあるう。三心を貫くに「疑蓋雜わること無き」を以てす。即ち「真実の一心」如来心の全てである。これを「金剛の真心」と名づけるのである。

噫。金剛の真心。

劫初久遠より、尽未來際にわたって滅ぶことなき、唯一絶対なる金剛不壞の真心。三界無安、猶如火宅、無常の大火に焼けざるたつた一つの真心。一切群生の無明の暗夜、五濁煩惱、穢惡不淨を超越して、これに染まざるたつた一つの真心。

至心とはこの真心であり、信樂も亦この金剛の真心であり、欲生も亦この唯一絶対の真心である。

真実の信心

「故に真実の一心なり。是れを金剛の真心と名づく。金剛の真心、是れを真実の信心と名づく。」

三心を貫く真実の一心、この真実の一心こそは「金剛の真心」である。その金剛の真心が、そのまま「真実の信心」と名づけられる。

憶うに、三即一の金剛の真心と云われる限り、金剛の真心は、衆生の心ではなくて、如来心そのものである。しかし「真実の信心」と云われる限り、衆生の上に開けた信心でなくてはならぬ。しかもこの如来心と、衆生の信心とを「金剛の真心、是れを真実の信心と名づく。」と説かれる所に、聖人の宗教の真面目が発揮せられてあるのである。

衆生の信心は、そのまま如来金剛の真心である。如来にあつては金剛の真心と云い、衆生にあつては真実の信心と云う。しかも二にして一、一にして二、如来金剛の真心は、真心徹到して衆生の骨髓に満入して、よく衆生の信心となる。如来はこれによつて久遠の大悲を完うじ、衆生はこれによつて「金剛の志を発し」以て「永き生死之元を絶ち」得て、ついに「斯の長き欺きを免れ」得るのである。如来金剛の真心に非ずして、どうして、かくの如きの志願を成就することが出来ようぞ。仏凡一体の妙境なる哉。

如実の信心

かくの如く、如来本願の大信心を光闡せられたる聖人は、更に、行信不離一体を明かし、正しき信心を説いて、

「真実の信心は必ず名号を具す。名号は必ずしも願力の信心を具せざるなり。」と、決判せられた。ここに言う名号とは、称名念仏のことである。真実の信心には、必ず名号の称念を具する。称名なき信心はないのである。重ねて言う、称名なき信心はあり得ない。しかしながら称名必ずしも信心ではない。信心成就せざる称名は、念

仏の声ではなくて、空疎なる、単なる音声であり、時に祈りの呪文であり、本能の声であり、貪欲の叫びであり、愚痴感傷の悲鳴であり、英雄主義者の高慢であり、時におおるべき猛獣の吼え声となるであろう。「名号は必ずしも願力の信心を具せざるなり。」これまことに、聖人をして、法然上人の往生之業念仏為本の宗風を伝承せしめつつも、信心正因称名報恩を絶唱せしめたる所以である。しかれどもこれを以て、祖聖が師の教旨を乱るものとしてはならない。「真実の信心は必ず名号を具す」と、あくまで真実の念仏道を開顕せられたのであるが故に。又曰く、

「是の故に論主（天親）建に我一心と言へり。又如彼名義欲如実修行相応故と言へり」と。

天親菩薩は『浄土論』の建に、

「世尊我一心 歸命尽十方無碍光如来 願生安樂国」と告白し讚嘆せられた。この論主の「一心」の華文こそ、聖人を動かすとらえたる重要尊重なる聖教であった。したがって、この「一心」と本願の「三心」とは、聖人の信心海に於ける根本基本の問題であつて、三心と一心との揚棄こそ、真に如来を信知する唯一の領解の態度であつた。信巻の根本問題も亦、ここにあつた。

如来は何故に、至心、信樂、欲生と三心を誓いたまい、論主は何故に「我一心」と叫ばれたるか。今や、この問題は完全に解決せられたのであつた。

三心を誓いたまわずば、真実信心は衆生において成就せず、我において發起せしめられる金剛の一心を深くさぐれば、そこには、至心、信樂、欲生の願意がある。今や聖人は、三心即一心の金剛心を獲得することによつて、天親論主の真意を開顕したもうのである。しかし「我一心」と信心を明らかにしたまいし論主は、又念仏行を説いて、「彼の名義の如く実の如く、修行し相応せんと欲するが故に」と、如来本願に相応して聖意の如く如実に念仏修行せんとの願を宣べられた。この引文によつて、聖人の「真実の信心には必ず名号を具す」との断定の独断に非ざることを明かしたもうたのである。

念仏行によらざれば浄土往生は不可能である。虚偽と権仮との八万四千の雜行を、大行によつて全否定されてのみ、我らは救われるのであり、同一行によつてのみ、我らの浄土は莊嚴されるのである。然し、かかる真実なる念仏行は、一切の不純と雜音を打破られたる信心の世界にのみ、あり得る故に信心の人は必ず真実の念仏行者であり、真実の念仏行者は必ず信心の人である。したがって我らは真宗の信者であつてはならない。「信心の行者」であらねばならない」

我らは今や、無限広大なる如来本願の規模と、聖人の無底の大信心海の内的風光とを領解することが出来た。謹んで頂戴すべきである。